密教儀礼の成立に関する一考察

――アビシェーカとプラティシュター――

森　雅秀

はじめに

密教を特徴づけるもののひとつにその儀礼体系がある。本来、バラモンたちの祭式至上主義とは対立する立場にあった仏教は、瞑想をはじめとする個人的な実践を別にして、ルーティーン化された集団的な宗教行為を忌避する傾向を持っていた。しかし、密教の時代になると弟子の入門儀礼であるアビシェーカ（abhiṣeka, 灌頂）や火の儀礼ホーマ（homa, 護摩）をはじめ、さまざまな儀礼や儀式が仏教の中に現れる。インドで最も一般的な尊像の礼拝形式であるプージャー、あるいはウパチャーラプージャーも僧院の内外で盛んに行われた。これらの密教儀礼の起源はこれまで漠然と「ヒンドゥー教から取り入れられた」と説明されることが多かった。しかし、ここであげられる「ヒンドゥー教」が、どの時代のどの地域のヒンドゥー教なのか、あるいはヒンドゥー教のいかなる宗派であるのかはほとんど説明されてこなかった。ヒンドゥー教の儀礼の多くがヴェーダ祭式に起源を持ち、現代にいたるまでその代表的な文献であるシュラウタ・スートラやグリヒヤ・スートラの伝統は生き続けているが、その一方でシヴァ派やシャークタ派のようなタントラ的色彩の濃い宗派も中世のヒンドゥー教では優勢であった。密教儀礼の形成が語られるときに、

その起源とされるヒンドゥー儀礼のクロノロジーや宗派間の差異にはまったく注意が払われてこなかったのである。

ここでは代表的な密教儀礼であるアビシェーカと、これにきわめて構造の類似したプラティシュター（pratiṣṭhā）という儀礼を取り上げて、これらの儀礼とヒンドゥー儀礼との具体的な対比から密教儀礼形成の背景を考察する。

プラティシュターとは文字どおりには「しっかり立てること」「支えるもの」を意味するが、一般には神像や仏像などの尊像、あるいは僧院、仏塔などの宗教的な施設が制作されたときに、その最終段階で行う儀式の名称として用いられる。プラティシュターの訳語としては、尊像の場合は「開眼供養」や「安置式」、僧院などの建造物の場合は「落慶式」が相当するであろう。これらを総称して「完成式」と呼ぶこともできる。

インドで仏像が制作されるようになったのは紀元二世紀ごろのことと考えられている。石や金属などで作られた仏や菩薩の似姿が、イコンとして礼拝や崇拝の対象となるためには、宗教的な意味をそれに与えるための特定の儀式が存在していたはずである。プラティシュターとはこのような目的のためにインド世界で広く実践されてきた宗教儀礼である。

プラティシュターの対象となるのは尊像ばかりではなく、僧院や仏塔などの宗教的な施設、僧院の中の貯水池・庭園、教えを記した経典、念珠をはじめとする仏具などさまざまである。これらはいずれも宗教的な場面で用いられる装置や道具であり、日常的、世俗的な物質とは本質的に異なるものでなければならない。プラティシュターとはこのような宗教的な物質に意味を与える行為、聖性を与える手続きと呼ぶこともできる。

プラティシュターは代表的な密教儀礼であるアビシェーカと多くの共通点を持つ。弟子が灌水をはじめとするいくつかのプロセスを経て仏の位を獲得するというアビシェーカの構図は、そのまま、尊像などが仏そのものへと聖別されるプラティシュターの図式に一致する。しかし、アビシェーカについてはこれまでも主要な経典や儀軌にもとづい

て、その形成過程や構造などがかなり解明されてきたのに対し、プラティシュターに関してはほとんど本格的な研究がなされていない。[1] なお、「アビシェーカ」の語は灌水や沐浴を行う儀礼の一プロセスにも用いられ、プラティシュターの中にも含まれている。混乱を避けるため、本稿では儀礼の要素としてのアビシェーカは「灌頂」と呼び、儀式全体としてのみ「アビシェーカ」の語を用いることにする。

インドの儀礼文献の中でプラティシュターが初めに現れるのは、カルパ・スートラの中で家庭内祭式をあつかったグリヒヤ・スートラ類であろう。グリヒヤ・スートラの時代、ヒンドゥー寺院が存在していたかは明らかではないが、いくつかのスートラに神像を対象とした完成儀礼としてプラティシュターがふれられている。そして、グリヒヤ・スートラの補遺文献であるパリシシュタ（pariśiṣṭa）やグリヒヤ・シェーシャ・スートラ（gṛhyaśeṣasūtra）になると、その記述はかなり詳細になる。しかし、プラティシュターに関して最も豊富な情報を提供するのはヒンドゥー教の聖典であるプラーナ類である。一方、建築学の文献や、ヒンドゥー・タントリズムの聖典類にもプラティシュターへの言及がある。仏教の場合、密教文献の儀軌類にプラティシュターをあつかった文献がいくつかあるが、いずれも比較的短く、その数もわずかである。その中で、後期密教の学僧アバヤーカラグプタによる大部のマンダラ儀軌Vajrāvalī（VA）には、かなり詳しいプラティシュターの説明が含まれる。[2]

一　プラティシュターの概要

VAに説かれるプラティシュターの儀式は「尊格のアディヴァーサナ」（devatādhivāsana）と「［狭義の］プラティシュター」というふたつの部分に全体が大きく分かれる（表1）。また、プラティシュターの儀礼全体に先立ち、所

表1 Vajrāvalī のプラティシュター

尊格のアディヴァーサナ

1 マンダラの準備
2 プージャー
3 水瓶の勧請と設置
4 三昧耶薩埵の生起
5 赤い衣と花を付ける
6 マンダラに入場
7 施主がマンダラの部族主の所に花を置く
8 沐浴の壇（snānavedī）の設置
9 四方と四隅に水瓶を設置
10 阿闍梨の沐浴と荘厳
11 椅子か獅子座を沐浴のマンダラに置く
12 椅子の上にプラティシュターの対象を置く
13 アルガなどの献供（省略可）
14 ニーラージャナ
15 芥子粒を対象の前で回し南東に投げる
16 水、牛糞などの旋回
17 対象に触れる
18 胸に香水を塗る
19 花輪を頭に結わえる
20 アルガの献供
21 灯明を回す
22 サッジャラの香の献供
23 [さまざまな沐浴]
24 五甘露とパンチャガヴヤによる沐浴
25 水による沐浴
26 五種の乳木の樹液で薫ずる
27 ゴマ油で薫ずる
28 アーマラクシー?で薫ずる
29 ターメリックで薫ずる
30 栴檀等の香木で薫ずる
31 水の灌頂の観想（如来と女尊による沐浴）
32 智薩埵のお招き
33 洗足水、漱口水、閼伽水の献供
34 プージャー
35 お招きとお近づきの偈を唱える
36 尊格の輪のプージャー、礼拝、称賛
37 尊格の輪のご帰還
38 尊像の胸、頭、首、腕、頭頂に芳香を塗る
39 プージャー
40 金剛杵を持った右手で対象に三度触れる
41 四方へのバリ

尊格などのプラティシュター

1 沐浴の壇の制作（=Nos. 8-12）
2 阿闍梨の荘厳（持金剛に扮する）
3 バリとプージャー
4 三昧耶薩埵の生起
5 パードヤ、アルガなどの献供（=Nos.13）
6 ニーラージャナ（=Nos. 14-22）
7 五甘露の塗布～水を拭う（=Nos. 23-30）
8 マンダラの家屋への移動

9 マンダラの北東の隅に安置
10 三昧耶薩埵と智薩埵の合一
11 智薩埵のお招き
12 お招きとお近づきの偈
13 三昧耶薩埵と智薩埵の合一
14 水灌頂
15 十方の如来と女尊のお招き
16 プージャー
17 灌頂の祈願の偈
18 甘露による尊像への灌頂の観想
19 阿闍梨による灌頂
20 沐浴の偈
21 金剛薩埵が灌頂をすると確信する
22 宝冠灌頂
23 尊像に宝冠を付ける
24 金剛灌頂
25 尊像に金剛杵を近づける
26 鈴灌頂
27 尊像に鈴を近づける
28 名灌頂
29 尊像に名前を付ける
30 阿闍梨灌頂
31 尊像が智恵の印を抱擁すると観想
32 水の灌頂を行う
33 部族主を頭に印として付ける
34 智薩埵を挿入
35 マントラによる対象の加持

36 秘密灌頂
37 菩提心を尊像の口に入れる
38 般若智灌頂
39 尊格がサハジャの楽を持つと念ずる
40 第四灌頂
41 プージャー
42 衣を供える
43 花などの供物を供える
44 果実を供える
45 財とgorocanaを供える
46 鏡を示す
47 ホーマ
48 開眼
49 乳粥の摂取
50 乳粥の準備
51 尊像に乳粥を召し上がっていただく
52 アーチャマナ、栴檀、キンマを供える
53 金剛薩埵が対象を加持することを思念する
54 対象に尊格がとどまることを請願する偈
55 金剛杵により対象を堅固にする
56 五仏への帰敬の偈
57 百字のマントラによるおゆるし
58 不備な点に関するおゆるしの偈
59 諸尊にご帰還をうながす偈
60 バリ（四方へのバリとブータへのバリ）
61 施主による尊像の右遶、プージャー、礼拝
62 施主による阿闍梨への布施

定のマンダラが準備され、その周囲には水瓶が安置されている（1・3）[3]。マンダラの種類はプラティシュターの対象によって決められ、さらに尊像のプラティシュターの場合、尊像の種類によっても異なる。マンダラの周囲の水瓶は、後述の水の灌頂で用いられる。以下の記述は尊像を対象としたプラティシュターの概要である。

プラティシュターのふたつの段階のうち、まず初めの尊格のアディヴァーサナではマンダラの西に四角い沐浴の壇を準備し（8）、その中央にプラティシュターの対象である尊像などを安置する（12）。沐浴の壇の四方と四隅にも水瓶が安置される（9）。ここには沐浴のための水が入れられている。沐浴の壇に置かれた尊像に対して、まず、ニーラージャナと呼ばれる儀式を行う（14）。芥子粒や水、牛糞などを順に両手に握り、尊像の前で回してから南東の方角に投げる。そして、尊像の胸に香水を塗り、花輪を頭に結わえ、アルガの献供を行い、その前で灯明を回す。これがニーラージャナの概要で、その目的はプラティシュターの対象の浄めと考えられる。このあと、尊像の沐浴が行われる（23）。沐浴には五種の甘露、パンチャガヴヤ（pañcagavya, 牛糞、牛尿、乳、カード、ヨーグルト）、水、五種の乳木の樹皮の煎じ汁、ゴマ油、ターメリック、栴檀などが用いられる。沐浴の壇の周囲の水瓶を用いるのはこの場面である（25）。沐浴を終えた尊像を布で拭い、尊格のアディヴァーサナが終了する。

狭義のプラティシュターを行う前に尊像などをマンダラの北東に移動し、ここで尊像の中に智薩埵を招き寄せ、三昧耶薩埵と合一させる（8～13）。

狭義のプラティシュターは水の灌頂をはじめとする九種類の灌頂を尊像に対して行う（14～40）。九種とは水、宝冠、金剛、鈴、名前、阿闍梨、秘密、般若智、第四の各灌頂である。水の灌頂では十方の如来や女尊が尊像に灌水する様子を観想し、阿闍梨自身、マンダラの周囲の水瓶から水を注ぐ（名灌頂）。宝冠以下の三種の灌頂ではそれぞれ名称となっている装身具や仏具を与える。名前の灌頂は命名式である。阿闍梨灌頂は尊像に対してふたたび水の灌頂

を行い、その結果、尊像の額に部族主の姿が浮かび上がる。また、智薩埵を尊像の中に挿入する。秘密灌頂では菩提心を尊像の口に投じ、般若智灌頂では女尊と性的な結合をした尊像がサハジャの楽を持つと念ずる。第四灌頂はことばによる灌頂である。

次に、灌頂を終えた尊像に対し、衣を供え、花、香、灯明、食物、塗香、装身具によるプージャーを行う（41以降）。また、果実や財も供える。これらの一連のプージャーの最後には鏡を尊像に示す（46）。プージャーのあとにホーマが行われるが（47）、これは省略されてもよい。

ホーマ、あるいはプージャーのあと、銀の器に入れたバターと蜂蜜が金の匙によって尊像の目に塗られる（48）。尊像の目を開くためのいわゆる開眼作法である。一方、ホーマの炉では乳粥が準備され、これを尊像に召し上がっていただき、さらに漱口水（ācamana）や栴檀、キンマなどを供える。ホーマを行わなかった場合、乳粥は別のところで準備される。

つづいて、金剛薩埵が尊像を加持することを思念し、また、プラティシュターの対象に招き寄せた尊格がその内部に長くとどまることを請願する（53・54）。さらに手にした金剛杵を尊像の前で回して、五仏への賛嘆の偈を唱えて主要のプロセスは終わる（55・56）。このあと、儀礼全体の終結部として百字のマントラ（百字真言）を唱えて、また、儀礼に不備がなかったかをわび、施食である四方へのバリ（bali）とブータ（鬼神）へのバリを行う（58・60）。最後に施主が尊像の礼拝とプージャーを行い、また阿闍梨に布施を与える（61・62）。

二　プラティシュターとアビシェーカの関係

VAの説くプラティシュターの内容を項目にして示すと以下のようになる。沐浴壇の設置、ニーラージャナ、沐浴、マンダラの北東への移動、三昧耶薩埵と智薩埵の合一（以上、尊格のアディヴァーサナ）、九種の灌頂、プージャー、ホーマ、開眼作法、乳粥の摂取、請願と帰依、お許し、バリ、施主による礼拝と阿闍梨の歓待（以上、狭義のプラティシュター）。

このうち、狭義のプラティシュターの初めに置かれる九種の灌頂は、そのまま弟子の入門儀礼であるアビシェーカの中でも行われる。弟子のアビシェーカはプラティシュターとならぶVAの主題のひとつで、その内容も同書の中で詳しく述べられている。VAの著者アバヤーカラグプタはVA全体を五十の儀軌で構成し、アビシェーカにはその第二十から第四十四までの二十五の儀軌を当てている。このうち、水の灌頂から第四灌頂までは二十四から二十八、三十、三十五から三十七に相当する（表2）。具体的な記述を比較してみると、プラティシュターの中の灌頂の方が記述が簡単であるが、儀礼の具体的な内容や阿闍梨の唱えることば、阿闍梨の行う観想の内容など、ほとんどすべてが両者で共通している。プラティシュターの中の灌頂が弟子のアビシェーカと同じであることは、アバヤーカラグプタ自身にも意識されている。「弟子のプラティシュターのように尊像などのプラティシュターを行え」という記述が過去の偉大な学僧（mahāratha, 大車）の著作にあるという根拠をあげて、尊像などにも灌頂が必要であることを強調している。ここでの「弟子のプラティシュター」とは弟子のアビシェーカを指している。アビシェーカを受ける弟子を尊像などに置き換えたものが、プラティシュターの中の九種の灌頂と考えていたようである。

九種の灌頂が弟子に対するアビシェーカの一部から混入したものであるとすれば、この部分を含まないプラティシュターの儀式がアバヤーカラグプタ以前にあったことが予想される。プラティシュターを説く密教文献は決して豊富とはいえないが、いくつか伝えられている。このうちアバヤーカラグプタよりも約一世紀前に活躍したと考えられるヴァーギーシュヴァラキールティ Vāgīśvarakīrti に Pratiṣṭhāvidhi (PV) という著作がある。[4] ヴァーギーシュヴァラキールティはヴィクラマシーラ僧院の六賢門のひとりに数えられるが、アバヤーカラグプタ自身もこの僧院の座主をつとめている。

PV の示す儀礼の概要は表3のとおりである。ここでも主要な項目を上げると、灌頂壇の設置、ニーラージャナ、水瓶の準備と設置、尊像の沐浴、プージャー、ホーマ、開眼作法、五仏の称賛、ホーマ、乳粥の施与、阿闍梨などによる乳粥の摂取となる。これを見ると PV の示すプラティシュターの各項目は、ほとんどすべてが VA のプラティシュターの中に含まれていることがわかる。儀軌の手順ばかりではなく、そのときに唱えられるマントラもよく一致する。しかし、このような密接な対応関係が認められるにもかかわらず、VA の九種の灌頂のみは PV においては欠落している。ただし、九種の初めにあげられる水灌頂に限り、沐浴の最後の段階で行われる、瓶の水による沐浴に相当する。また、そのときには VA と同じように、虚空

表2 Vajrāvalī のアビシェーカ

20	**弟子の招請**	33	鏡の灌頂
21	師の入場	34	矢の射撃
22	弟子の入場	35	**秘密灌頂**
23	花輪の灌頂	36	**般若智灌頂**
24	**水灌頂**	37	**第四灌頂**
25	**宝冠灌頂**	38	明知の誓誡
26	**金剛杵灌頂**	39	金剛の誓誡
27	**鈴灌頂**	40	行為の誓誡
28	**名灌頂**	41	授記
29	三種の誓約の授与	42	許可
30	**阿闍梨灌頂**	43	蘇生
31	マントラの授与	44	自分自身による灌頂
32	**眼薬**		

(数字は50儀軌の通し番号、**太字**はプラティシュターに共通する項目)

表3 Pratiṣṭhāvidhi のプラティシュター

1 プラティシュターの場を準備する
2 傘蓋、幢、旗などで飾る
3 プラティシュターの場にプラティシュターの対象を安置する
4 プラティシュターの対象に洒水し、顔を拭う
5 虚空の如来に五種のプージャー
6 阿闍梨が虚空の如来に請願
7 偈頌によって如来を招請する
8 ホーマ
9 ニーラージャナ
10 尊像の前で両手に白芥子を握り、右手を三度回して南東に投げる
11 左手でも三度回して南東に投げる
12 水を手ですくい南東に投げる
13 水瓶を準備する（水瓶の数は五、八、あるいは一）
14 水瓶の中に香水を満たす
15 水瓶に帯を二本巻く
16 パラーシャの木の枝で口を飾る
17 白芥子と花と一緒に五宝、五穀、五薬を入れる
18 水瓶を安置する
19 水瓶をひとつひとつ手にとり、マントラを唱える
20 黄色い布を神像に巻き、東に顔を向ける
21 沐浴
22 パンチャガヴヤ
23 よい香のするゴマ油
24 ダルバ草で拭く
25 ウドゥンバラ、ニヤグローダの樹皮から作った煎じ薬を丸い容器に入れ、阿闍梨の右側に置き、神像に塗る
26 水瓶の中の水で沐浴申し上げる
27 虚空の女尊が手にする瓶の甘露で沐浴申し上げることを観想する
28 神像についた水を拭い、それぞれの場所（?）に安置する
29 プージャー
30 衣を着せる
31 クシャ草で神像に洒水し、アーチャマナを行う
32 花などの五種の供物をマントラとともに供える
33 ホーマ
34 神像の目をへらで開ける
35 金剛杵を持ち、金剛鈴を回しながら五仏を称賛する
36 ホーマ
37 乳粥（caru）をマントラで浄め、成就させる
38 阿闍梨と弟子、施主が乳粥を摂取する

の女尊たちが甘露の瓶で尊格を沐浴申し上げることを観想する。

両文献のあいだにはこのほかにもいくつか相違点もある。儀礼全体が尊格のアディヴァーサナと狭義のプラティシュターからなることは同じであるが、その切れ目がVAでは沐浴のあとであったのに対し、PVではニーラージャナのあとに置かれている。沐浴壇のまわりの水瓶の準備と設置も、VAでは沐浴壇の設置に含まれていたが、PVではニーラージャナと沐浴のあいだに行われる。また、PVでは儀式の最後に、尊像に供えた乳粥を阿闍梨や弟子、施主がお下がりとして摂取するが、このプロセスはVAには含まれない。

このように相違点がいくつか認められるが、VAのプラティシュターはPVの説く同じ儀礼に水灌頂を除く八種の灌頂を加えた形とみることができる。実際、プラティシュターを扱うこれ以外の文献を見てみると、いずれもVAやPVと共通の構造を持ちながらも、VAと同じ第四灌頂にいたる複数の灌頂を説く文献はひとつもなく、いずれも水瓶の水による灌頂のみが説かれている。「弟子のプラティシュターのように尊像のプラティシュターを行え」という規定に忠実に、アバヤーカラグプタかあるいはその先人が、後期密教の複雑化した弟子の灌頂を尊像のプラティシュターにも適用したとみてよいであろう。[5] 水灌頂のみを沐浴のプロセスに含む方法が、VA以前の密教のスタンダードなプラティシュターのスタイルであると考えられるのである。

ここにみられる儀礼の流れは初期、中期密教の伝えるアビシェーカの構造に酷似している。たとえば『大日経』に説かれるアビシェーカはマンダラの横に灌頂壇を作り、周囲に宝瓶を配して、この水で弟子の灌頂を行う。灌頂の前後には弟子に衣、香、花、塗香などの供物を与え、閼伽水も献ずる。金のへらで弟子の目を象徴的に開ける開眼作法もそのあとで行われる。儀式の最後には、やはりホーマやバリが置かれている。このように、灌頂壇を作り、そこで水灌頂（瓶灌頂）のみを行うアビシェーカのスタイルは、『金剛手灌頂タントラ』などにも同様に含まれ、密教のア

ビシェーカの初期的な形態であったことがわかる。[6] PV などに説かれるスタンダードなプラティシュターと初期のアビシェーカとのこのような類似性は偶然によるものとは考えにくい。これらの儀礼に共通するモデルがどこかに求められるのではないだろうか。

ところで、密教のアビシェーカはしばしば「古代インドにおける国王の即位儀礼」を起源とすると説明される。四大海の水を帝王の頭上に注ぐことで、王が王権を掌握し王位についたように、三世の法王としての仏の地位を弟子が獲得すると説明される。『大日経』をはじめとする初期、中期密教の灌頂儀礼が瓶灌頂を中心とするのはこのためで、VA のようなインド密教の最終的な段階においても、儀礼全体は肥大化しても水灌頂として類似のプロセスは必ず含まれている。「アビシェーカ」という言葉自体も水を注ぐことがこの儀礼の本来の中心部分であったことを示している。それでは、実際に古代のインドでは密教のアビシェーカのモデルとなるような儀礼が行われたのであろうか。

三　ヴェーダ文献の国王即位儀礼

古代インドの国王の即位儀礼は、ヴェーダの諸文献に記されている。しかし、その記述は古いものほど断片的で、限られた情報から再構成せざるを得ない。[7]

国王即位儀礼を伝える最も古い文献は Atharva Veda (AV) 4.8 といわれる。ここには、王に対して水を注ぐという記述が見られる。これが灌頂である。この場合の水は「天界の水」や「乳」と呼ばれ、光輝をともなって注がれるという。ここで「光輝」を表すのは várcas という語で、光の他にエネルギーや生命力に近い意味を持つ。AV の当該箇所ではこの灌頂とともにふたつの要素が即位儀礼に現れる。ひとつは王が虎の皮に上り、その上を歩むことである。

AV 4.8.4 では王は一虎として虎皮の上で偉大なる方角を闊歩せよ」とある。もうひとつの要素として、王が車に乗ることがあげられる。AV 4.8.2 では、王が車に乗り、敵を殺戮するものとして進めと、また AV 4.8.3 では、車にのぼった王が皆に取り囲まれ、みずから輝く王として進むとある。

このように、AV の伝える王の即位儀礼は、生命力やエネルギーをそなえた水を注ぐ灌頂とともに、王が虎の皮の上に上ることと車に乗って進むというふたつを加えた三つの要素から全体が構成されていたらしい。これら三つの要素は AV 以降のヴェーダ文献で国王の即位儀礼を説く箇所にほぼコンスタントに現れる。このことは AV の本文がその後の文献の当該箇所で儀礼の中のマントラとして現れることからも確認される。

AV のグリヒヤスートラに相当する Kauśika Sūtra (KauśS) は、ラグ・アビシェーカとマハー・アビシェーカという二種の即位儀礼を含む。前者は灌頂水の準備、ダルバ草に坐って灌頂を受ける、雄牛の皮で作った椅子に上る、プローヒタと王が容器に水を注ぎ交換する、儀礼的な食事をとる、馬に乗って「敗れることなき方角」に赴く、布施というプロセスで構成される。このうち、雄牛の皮の椅子に上る部分が虎皮に上ることに、馬に乗って進む部分が車に乗ることに対応していることが、AVのマントラの使用から確認できる。マハー・アビシェーカではこれにさらにいくつかの要素を加えるが、三つの要素が現れることにはかわりはない。

ヴェーダ文献が伝える国王即位儀礼として最も有名でかつ重要なものはラージャスーヤである。黒ヤジュル・ヴェーダに属する Taittirīya Brāhmaṇa (TaitBr) 1.7.4-10 の説くラージャスーヤの全体の構造は表4のとおりである。全体にはさまざまな要素が含まれるが、AV に由来する三つの要素はここでもすべて現れる（表4の傍線部参照）。しかし、これら三つの要素が全体に占める割合は小さく、散発的に現れるにとどまる。そして全体はこれまでの文献には含まれなかった新たな要素で占められていることがわかる。

表4　Taittirīyabrāhmana のラージャスーヤ（土山、1997 による）

1 devasū 神群への献供
2 祭主の顔を拭く
3 灌頂水の準備、浄化、分割
4 衣服、祭主の浄め、食事
5 avid-mantra によって神を現前させる
6 弓矢を持つ
7 両腕を上げる
8 諸方に歩く
9 マルト神群への献供
10 虎皮を敷く
11 金銀を持つ
12 去勢者を遠ざける
13 銅を遠ざける
14 灌頂
15 余った水の献供
16 名称交換儀礼
17 車の定置、乗る
18 牛の中でとめる
19 猪の皮の草履を履き、地上に降りる
20 銀、ウドゥンバラ、金の護符を身につける
21 献供
22 椅子の設置
23 椅子に上がる
24 王に対してマントラを唱える
25 礼拝
26 種蒔き
27 王に乳を塗る
28 献供
29 虎の皮を敷いて、坐る
30 王に対してマントラを唱える
31 灌頂
32 両腕の上げ下ろし
33 車に乗る
34 太陽を見上げる
35 人民を見る

同じ黒ヤジュル・ヴェーダのシュラウタ・スートラでは、Baudhāyana Śrautasūtra (BaudhŚS) が、TaitBr に似た即位儀礼である Mṛtyusava を伝える。「死の祭り」を意味するが、この場合の「死」は虎を意味すると解釈され、儀式に現れる虎の皮と関係づけられている。灌頂をはじめとする三つの要素がこの儀式にも現れることはいうまでもない。

このように、ヴェーダ文献の伝える国王の即位儀礼には、水を新しい王に注ぐ灌頂が確かに例外なく現れる。これは生命力やエネルギーが宿った水を王に注ぎ、新しく即位する王がこれを身につけたことを意味したのであろう。ヴェーダの祭式を生み出した人々の水に対する特別の思い入れを読みとることができる。しかし、即位儀礼にはその他にも虎の皮にのぼること、そして車（あるいは馬）に乗って進むというふたつの要素が同時に現れた。そしてこれら三つの要素は、即位儀礼がどんなに肥大化しても、ほとんどすべての文献に含まれていた。しかしその一方で、現存するヴェーダ文献に見られる即位儀礼で、この三つの要素のみで構成されるものはなく、いずれの場合もさらに多くの要素が加えられている。最も重要な即位儀礼であるラージャスーヤはその典型である。

『大日経』などに見られる初期の灌頂儀礼をこれらのヴェーダ文献の即位儀礼に比べてみると、共通するのは受者に水を注ぐというプロセスのみに限られる。灌頂以外のふたつの要素がまったく含まれないばかりでなく、具体的な儀式が再構成できるKauśSの即位儀礼や、長大な儀式となったラージャスーヤに見られる付加部分と共通する部分は、まったくと言っていいほど認められない。水を注ぐ灌頂のプロセスが国王即位儀礼として最も重要な要素のひとつであることは確かであり、密教の初期の灌頂儀礼においても、灌水のプロセスは全体の中心的な位置を占めている。密教の灌頂儀礼の起源を古代インドの即位儀礼に求めることは「理念的には」可能かもしれない。しかし、それ以外の部分の完全なまでの不一致は、密教徒が灌頂儀礼を作り出したときのモデルが、古代インドの国王即位儀礼ではなかったことをはっきりと示している。アビシェーカの「実質的な」起源は、国王の即位儀礼には求められないのである。

四　ヒンドゥー儀礼としてのプラティシュター

ふたたびプラティシュターにもどろう。初めに述べたようにプラティシュターに関する儀軌は、グリヒヤ・スートラやプラーナ文献の中に含まれる。このうち、まとまった記述があるものはグリヒヤ関係では Vaikhānasa Gṛhyasūtra (VaikhGS), Bodhāyana Gṛhyaśeṣasūtra (BodhGŚS), Āśvalāyana Gṛhyapariśiṣṭa (ĀśvaGPŚ) があげられる。このうちあとのふたつはグリヒヤ・スートラの補遺文献である。プラーナ文献では Matsya Purāṇa (MatsyaP), Agni Purāṇa (AgniP), Garuḍa Purāṇa (Garuḍa), Nṛsiṃha Purāṇa (NṛsiṃhaP), Viṣṇudharmottara Purāṇa (ViṣṇudharmottaraP) にプラティシュターに関する詳細な儀軌が含まれる。これらのプラーナのうち初めの三つは十八の重要なプラーナ（マハープラーナ）に数えられ、あとのふたつは副次的なプラーナ（ウパ・プラーナ）である。またヴィシュヌ派の系統のプラーナが多いが、初めの MatsyaP はシヴァ派とヴィシュヌ派の両者の影響を受けているといわれる。[8] このほか、パンチャラートラ派の経典である Sāttvata Saṃhitā (SātS) にもプラティシュターに関するまとまった記述がある。[9] 占術書として著名な Bṛhat Saṃhitā (BṛhatS) もプラティシュターのためにひとつの章をさいている。[10]

これらの諸文献に見られるプラティシュターの儀礼内容を検討してみると、大きくふたつのタイプにまとめることができる（表5、6）。一つめのタイプは全体が比較的少ないプロセスで構成され、神像の沐浴と台座などへの神像の安置が中心を占める。BodhGŚS と VaikhGS そして NṛsiṃhaP がこのタイプのプラティシュターを説く。ĀśvaGPŚ はグリヒヤ関係の文献であるが、このタイプには相当しない。第一のタイプの特徴として神像を水に浸す

プロセスがあげられる。これは沐浴と安置のふたつの部分の前に置かれる。神像の目を開ける開眼もBodhGSSとVaikhGSには含まれるが、その位置は共通ではなく、前者の場合、沐浴の前、後者では神像を水に浸す前に行われる。NṛsiṃhaPは開眼作法に言及しない。この第一のタイプのプラティシュターをグリヒヤ・スートラ・タイプと呼ぶことにしよう。

第二のタイプには残りの文献すべてが相当する。NṛsiṃhaPを除くプラーナ文献のすべてがこのタイプであることから、便宜上プラーナ・タイプと呼ぶが、実際はヒンドゥー教の諸文献やBṛhatSのような占術書もこのグループに属するので、ヒンドゥー儀礼タイプと呼ぶべきかもしれない。いずれにしても、文献のクロノロジーから考えて、グリヒヤ・スートラ・タイプよりも遅れて成立したことは明らかである。

グリヒヤ・スートラ・タイプのプラティシュターが二、三日で終了したのに対し、プラーナ・タイプでは少なくとも四日は必要とし、儀式が長期化している。しかも、単にグリヒヤ・スートラ・タイプを増広してできあがったのではない。

表5 グリヒヤ・スートラ・タイプのプラティシュター

A	神像を水に浸す
B	神像を安置（きれいな場所、vedi, マンダパ）
C	神像の沐浴
D	神像の搬入と安置（部屋、台座）
E	終結部（布施、饗応など）

表6 プラーナ・タイプのプラティシュター

A	マンダパを作る	H	台座の安置
B	神像の開眼作法	I	神像を起こす
C	神像の沐浴	J	寺院への神像の搬入
D	マンダパへの神像の搬入	K	寺院での神像の安置
E	就寝儀礼	L	終結部（2）
F	ホーマ	M	四日目の儀礼
G	終結部（1）		

プラーナ・タイプのプラティシュターの第一の特徴は、全体がアディヴァーサナと狭義のプラティシュターに分かれることである。初めのアディヴァーサナの中心となるのは、神像の開眼作法と沐浴、そして神像の就寝儀礼である。また、儀式の初めにはマンダパといわれる特別な場が準備される。ここはアディヴァーサナの就寝儀礼において神像が床に就く場所である。マンダパは四角で、四門と四つのトーラナを持ち、周囲には旗が飾られ、また水瓶も安置される。さらに文献によってはマンダパの他にも沐浴のための小屋を作り、ここで神像の沐浴を行う。沐浴小屋を作らない場合は沐浴もマンダパで行われる。沐浴と就寝儀礼のあいだにはしばしばプージャーが置かれ、花や香などの供物、衣や装身具などが沐浴を終えた神像に捧げられる。就寝儀礼を行ったあとには、多くの場合、ホーマが行われる。そして、司祭であるバラモンの供応や布施などの、多くのヒンドゥー儀礼の終結部に見られる一般的な儀礼でアディヴァーサナは終了する。

狭義のプラティシュターは寺院に神像を搬入し、所定の位置に安置することを主たる目的とする。これに先立ち、神像を安置するための台座の準備と設置が行われる。神像を運び出す前には、神像を儀礼的に覚醒させる「目覚めの儀礼」が行われ、覚醒した神像を車に乗せ、寺院のまわりを数回にわたって右遶し、その後、神像を寺院内に搬入する。安置のあとで神像に対し灌水や沐浴を行うことも多くの文献が規定している。ウパチャーラプージャーを行う場合もある。儀式全体の終わりにはふたたびバラモンの供応や布施が行われ、また、ブータや諸方へのバリも行われる。「四日目の儀礼」と呼ばれる神像の沐浴やホーマ、バリ、バラモンへの布施も、いくつかの文献にあげられる。

プラーナ・タイプに属する諸文献はいずれもこれらの儀礼の要素を含み、各プロセスの順序も、一部には一致しないものもあるが、ほぼ共通している。しかし、いずれも文献でもこれ以外の要素も多く含まれ、儀式全体はきわめて複雑になっている。そしてこのような付加部分の内容によって、各文献を生み出した宗派やグループの独自性が現れ

る。とくに最高神の瞑想や神の勧請、神像の各部へのマントラのニヤーサなどは、儀式全体をタントラ的な性格に変化させる重要な要素である。

一方、BṛhatS のように儀礼に関する説明は簡略にとどめ、具体的な方法は各宗派の儀軌類にしたがうように指示するものもある。これは BṛhatS が成立した六世紀ごろには、すでにプラティシュターの方法が宗派間で異なっていたことのあらわれであろう。しかし、それにもかかわらず、BṛhatS はアディヴァーサナではマンダパの制作と神像の沐浴、そして就寝儀礼を簡単に説明し、狭義のプラティシュターでは神像の神殿の右遶と台座への神像の安置を指示していることから、これらを含むアディヴァーサナとプラティシュターの枠組み自体は、いずれの宗派でもほぼ共通していたことをうかがわせる。

五　聖別儀礼の形成

前節で見たヒンドゥー儀礼としてのプラティシュターのふたつのタイプ、すなわちグリヒヤ・スートラ・タイプとプラーナ・タイプのあいだにはかなり大きな断絶がある。プラーナ・タイプのプラティシュターはグリヒヤ・スートラ・タイプのそれを単に複雑にしただけではない。就寝儀礼や神像の目覚めのプロセス、四日目の儀礼はグリヒヤ・スートラ・タイプにはさかのぼり得ない。また、グリヒヤ・スートラで必ず見られた神像を水に漬けるプロセスは、プラーナ・タイプでは完全に姿を消している。しかしグリヒヤ・スートラ・タイプの多くの項目がプラーナ・タイプの中に見出せるのも事実である。神像の沐浴や開眼作法はいずれのタイプにも含まれた。さらに神像に対して衣や花などを供えるウパチャーラプージャーもしばしば行われた。グリヒヤ・スートラ・タイプがプラーナ・タイプの祖型

ではないにしても、それを生み出すための素材の一つではあったのであろう。

さて、密教徒が行っていたプラティシュターとこれらヒンドゥー儀礼のプラティシュターとを比べてみよう。VAのプラティシュターは後期密教の弟子のアビシェーカからの流入部分が見られるので、PVに見られたスタンダードなプラティシュターについて検討すると、そこに現れるほとんどの要素がプラーナ・タイプのプラティシュターに見出され、またいくつかはグリヒヤ・スートラ・タイプにも認められることがわかる。もちろん、三昧耶薩埵と智薩埵の合一のような密教独自の瞑想法や、五仏の称賛などが含まれないのは当然であるが、これはプラーナをはじめとするヒンドゥー教の諸文献においても、それぞれに独自な部分があったことと同じである。儀式全体がアディヴァーサナと狭義のプラティシュターからなることも両者で共通である。前節では触れなかったが、ニーラージャナはMatsyaPに含まれ、乳粥の分配はSātSでも見られる。PVが乳粥に相当するものとしてあげるcaruという名称も、ホーマのときに作られる神饌としてヴェーダ祭式やヒンドゥー儀礼に一般的なものである。

このように密教のプラティシュターを構成する儀礼の要素はヒンドゥー儀礼のプラティシュターにほとんどすべてが含まれている。そしてアディヴァーサナとプラティシュターからなる全体の構造自体も一致する。しかし、すでに見たようにプラーナ・タイプのプラティシュターはさらに多くの要素をそなえていた。すなわち、就寝儀礼や目覚めの儀礼、神像の搬入と安置のプロセス、四日目の儀礼などである。これらはプラーナ・タイプの諸文献には共通して見られる基本的な要素でありながら、密教のプラティシュターには現れない。密教版のプラティシュターは、ヒンドゥー教版のプラティシュターの前半部分であるアディヴァーサナの部分にほぼ対応箇所が見出される。そしてその多くはグリヒヤ・スートラ・タイプとも共通しているのである。

グリヒヤ・スートラ・タイプとプラーナ・タイプをつなぐような文献がヒンドゥー教側に見出せないことから、あ

くまでも推測に頼らざるを得ないが、密教徒が行っていたプラティシュターの儀式は、グリヒヤ・スートラ・タイプからプラーナ・タイプに移行する時期に位置づけることができるのではないだろうか。ヒンドゥー教のプラティシュターと同じ名称を持ち、同じ目的で行われ、類似の構造を持つ密教のプラティシュターが、その影響下で形成されたと考えても何ら不自然ではないであろう。

すでに強調したように、密教における初期のアビシェーカの構造はスタンダードなプラティシュターのそれによく一致している。密教のプラティシュターがヒンドゥー儀礼のプラティシュターの影響を受けて成立したとすると、密教のアビシェーカのみがそれとはまったく無関係に形成されたとは考えにくい。また、密教のアビシェーカの影響を受けてヒンドゥー儀礼のプラティシュターが作られたということも、両宗教間の力関係や、あるいはプラティシュターを説くヒンドゥー教の諸文献の時代や宗派の広がりから考えてもまずあり得ない。

BṛhatS が各宗派の方法に従ってプラティシュターを行えと指示する箇所では、ヒンドゥー教の諸宗派に混じって仏教の名称が含まれている。ここから遅くとも六世紀の段階では仏教独自のプラティシュターの方法が成立していたことが知られる。もちろん、「アビシェーカ」という語がヴェーダ以来の国王即位儀礼にも用いられ、水を注ぐことの理念的な淵源がそこに求められるかもしれないが、アビシェーカという儀式全体を実際に構成する素材やその構造はグリヒヤ・スートラ以来のプラティシュターの中に見出すことができるのである。沐浴の場での沐浴、すなわち灌頂をひとつの重要な要素とするプラティシュターの儀礼がヒンドゥー教側に初めにあって、これを弟子に応用して、そのイニシエーションとしたのがアビシェーカで、そのまま仏像の完成式として受け継いだのが密教版のプラティシュターと考える方が自然であろう。密教徒にとってはアビシェーカもプラティシュターも、対象を聖なるものとする儀礼、すなわち聖別の儀礼であって、対象の違いを除けば両者に区別を与える必要はないのである。

註

(1) プラティシュターについてはこれまでに拙稿を発表してきた（1995, 1996）。また本稿の内容は拙著（1997）にも含まれている。Bentor（1996）は仏教のプラティシュターを初めて本格的に扱った文献として重要である。

(2) 正式の名称は *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā*. VAについてはMori（1997）参照。

(3) 括弧内の数字は表1の通し番号を示す。

(4) Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, No. 3952, Vol. 80,36.5.1-38.1.2.

(5) このことはVAに説かれるその他のプラティシュターの次第によっても確認される。VAには尊像のプラティシュターの他に念珠、典籍、貯水池、庭園などを対象とするプラティシュターが説かれるが、いずれも灌頂の部分は水の灌頂のみが行われ、金剛杵から第四までの八種の灌頂は含まれない。また、VAには簡略なプラティシュターと呼ばれる短いプロセスのプラティシュターが説かれるが、ここでも水灌頂のみが行われる。

(6) 『大日経』をはじめとするこれらの経典に見られるアビシェーカについては大塚（1993, 1995, 1996）に詳しい。

(7) ヴェーダの王権儀礼に関するこの章の記述は土山泰弘氏の一連の研究（1988,1989a,1989b,1995,1996）によっている。ラージャスーヤに関してはHeesterman (1957), Gonda（1996）が詳しい。

(8) プラーナのプラティシュターに関しては引田（1996a）にまとめられている。ここでも同論文を参照した。

(9) Hikita (1996), 引田 (1996b).

(10) Ramakrishna Bhat (1981), 矢野・杉田（1995）参照。このほかヒンドゥー教諸派の多くの儀軌文献にもプラティシュターに関する記述は含まれる。このうち、パンチャラートラ派の文献を用いてSmith（1984）はその概要をまとめている。

略号

AgniP : Agni Purāṇa

ĀśvaGPś : Āśvalāyana Gṛhyapariśiṣṭa

AV : Atharva Veda

BodhGSS : Bodhāyana Gṛhyaśeṣasūtra
GaruḍaP : Garuḍa Purāṇa
MatsyaP : Matsya Purāṇa
NṛsiṃhaP : Nṛsiṃha Purāṇa
PV : Pratiṣṭhāvidhi
SātS : Sāttvata Saṃhitā
TaitBr : Taittirīya Brāhmaṇa
VA : Vajravalī-nāma-maṇḍalopāyikā
VaikhGS : Vaikhānasa Gṛhyasūtra
VisṇudharmottaraP : Viṣṇudharmottara Purāṇa

引用文献

大塚伸夫　1993　「『大日経』の曼荼羅行」（『密教学研究』二五、八五―一二三頁）。
大塚伸夫　1995　「『金剛手灌頂タントラ』における曼荼羅行について」（『豊山教学大会紀要』二三―〈一三〉―〈五三〉）。
大塚伸夫　1996　「『蘇悉地耶経』の曼荼羅行について」（『密教学研究』二八、八九―一三九頁）。
土山泰弘　1988　「『アタルヴァ・ヴェーダ』の即位儀礼―AV.4.8―」（『印度哲学仏教学』三、一五五―一六九頁）。
土山泰弘　1989　「ムリティウ・サヴァとラージャ・アビシェーカ―マントラ・コレクションとシュラウタ・スートラの関係―」（『藤田宏達博士還暦記念論集　インド哲学と仏教』、春秋社、一四七―一五九頁）。
土山泰弘　1989　「古代の王権と vārcas」（『印度学仏教学研究』三八―一、四五四―四五〇頁）。
土山泰弘　1995　「アタルヴァ・ヴェーダの王権―AV.3.4. の注記と研究―」（『印度哲学仏教学』一〇、二一―三五頁）。
土山泰弘　1997　「ヴェーダの王権儀礼―abhiṣeka を中心として―」（東京大学東洋文化研究所研究会配布資料）。
引田弘道　1996　「プラーナ文献に見る神像奉納儀礼」（『愛知学院大学文学部紀要』二五、一一―四六頁）。
引田弘道　1996　『ヒンドゥータントリズムの研究』、山喜房佛書林。

森　雅秀　1995　「インド密教におけるプラティシュター」（『高野山大学密教文化研究所紀要』九、二七―六五頁）。
森　雅秀　1996　「インド密教におけるプラティシュターの構造」（『印度学仏教学研究』四四―二、一五九―一六三頁）。
森　雅秀　1997　『マンダラの密教儀礼』、春秋社。
矢野道雄・杉田瑞枝　1995　『占術大集成―古代インドの前兆占い　1』、平凡社。
Gonda, J.　1966　*Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View.* Leiden : E. J. Brill.
Heesterman, J. C.　1957　*The Ancient Indian Royal Consecration : The Rājasūya Described according to the Yajus Texts and Annoted.* The Hague : Mouton & Co.
Hikita, Hiromichi　1996　Sattvata Saṃhitā : An Annotated Translation Chaper 25 (1) *Ningenbunka* 10 : 129-163.
Mori, M.　1997　*The Vajrāvali of Abhayākaragupta.* (PhD Dissertation submitted to the University of London).
Ramakrishna Bhat, M.　1981　*Varāhamihira's Bṛhat Saṃhitā,* part 1. Delhi : Motilal Banarsidass.
Smith, H. D.　1984　Pratiṣṭhā. In K. K. A. Venkatachari ed., *Agama and Silpa : Proceedings of the Seminar Held in December, 1981.* Bombay : Ananthacharya Indological Research Institute, pp. 50-68.

付記

本稿の内容の一部は、一九九七年三月に東京大学東洋文化研究所で行われた「プラティシュターに関する研究会」において発表した。発表に際しては、研究代表者の永ノ尾信悟先生（東京大学教授）をはじめとする研究会のメンバーより、貴重な御意見をうかがったことに、謝意を表します。

インド密教の形成と展開

一九九八年七月二一日　初版第一刷発行

編著者　松長有慶

発行者　西村七兵衛

発行所　株式会社 法藏館
京都市下京区正面通烏丸東入
郵便番号　六〇〇-八一五三
電話　〇七五-三四三-〇〇三〇（編集）
〇七五-三四三-五六五六（営業）

印刷　中村印刷株式会社　製本　新日本製本

© Y. Matsunaga 1998 Printed in Japan
ISBN 4-8318-7350-0 C3015
乱丁・落丁本の場合はお取り替え致します